

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 1 日現在

機関番号：35402

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720180

研究課題名(和文) 琉球語奄美方言文法記述のための基礎研究

研究課題名(英文) Basic research for grammatical description of Amami-Ryukyuan

研究代表者

重野 裕美 (Shigeno, Hiromi)

広島経済大学・経済学部・助教

研究者番号：70621605

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：琉球諸語の中でも特に報告の少なかった奄美方言(主に奄美大島浦方言)を対象として、文法書ならびに一般向け解説書作成のための基礎研究を目的とし、類型論的な視点に基づいた文法記述を行った。に関しては、語彙や談話を収集し、音素目録を作成した。質問紙調査から、名詞、動詞、形容詞の形態的特徴を記述した。に関しては、語彙や談話を仮名表記にし、日本語訳をつける作業を進めている。

研究成果の概要(英文)：In this research, I described the grammatical system of the Ura dialect in Amami-Oshima from a typological point of view. There had been only a few reports on the dialect, fewer than those on the other varieties that belong to Ryukyuan languages. The current research had two aims: (1) to provide a descriptive grammar of the dialect (for linguists) and (2) to make a textbook for non-academic learners of the dialect. As for as the first aim (1), I recorded and transcribed natural discourse, made a wordlist, provided a phonemic inventory and described morphological characteristics of the noun, the verb and the adjective of the dialect by analyzing the data obtained from field research. In order to achieve the second aim (2), I am currently working on adding transcription in hiragana and translation in Japanese to the wordlist and the discourse data.

研究分野：言語学

キーワード：琉球諸語 記述言語学

1. 研究開始当初の背景

言語のグローバル化が進む中で、少数言語が急速に失われつつあるため、国内外の研究機関による言語の記録・保存、継承の促進が急がれている。琉球諸語圏では、生活語として伝統的な方言を用いる話者は70歳代以上に限られ、60歳代から40歳代は方言敬語などが上手く操れず、日本語が混ざった中間言語を話す。30歳代以下は方言を聞いても分からない世代である。

琉球語話者は、年々減少の一途をたどっている。琉球諸語には、古代日本語と共通する文法的特徴や、特色ある音声・音韻現象が認められ、その調査・研究は日本語の史的变化の解明や通言語的な言語理論の構築に資する多くのデータを提供し得るものである。

2. 研究の目的

本研究は、これまでの研究成果を踏まえ、類型論的な視点に基づいた文法記述（主に奄美大島浦方言を対象）を行うことで、一方では琉球諸語の文法記述の枠組み構築に寄与し、他方では琉球語奄美方言の記録・保存・継承に役立てる文法書ならびに解説書の作成を行うことが目的として掲げた。具体的な研究項目は、博士論文で取り扱った研究成果の発展とともに、(1)フィールドワークによる総合的な文法記述書の作成、そして(2)地元還元・方言継承に資することができる一般向け解説書の作成、の2つである。

3. 研究の方法

本研究計画は3年である。その遂行過程は次の6つの段階に分かれる。(1)琉球諸語の体系的記述（音韻・形態・統語）のための先行研究・文献の調査、(2)文法記述の手法や記録・分析に関する情報収集、(3)フィールドワークによる琉球語奄美方言の文法項目調査と自然談話資料の収集、(4)調査から得られた資料に基づき、音韻・形態・統語・談話と段階的に分析、(5)前段階の分析を類型論的観点から整理し、理論家や他言語の専門家にも役立つ文法記述書の作成、(6)以上の作業を基盤にした、一般向け解説書の作成、である。

類型論的視点に基づいた文法記述の枠組みは、南琉球伊良部方言を総合的に記述した Shimoji, Michinori (2008) *A Grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan Language* (PhD thesis) Australian National University を参照した。例文は、分節ごとに分かち書きを行い、1行目に筆者の音素分析に基づく音韻表記、2行目にグロス（文法的意味）をつけ、3行目に日本語による直訳または意識を記す。「=」は接語境界、「-」は接辞を示す。グロスのつけ方や例文の提示方法については、マックスプランク進化人類学研究所の Leipzig Glossing Rules を利用する。本報告書では言語学の専門家以外も読者として想定しているため、グロスを日本語に訳して表示する。

4. 研究成果

本研究では、奄美大島方言を対象に動詞を中心とした敬語法の全体像を解明（重野 2012-2014）するとともに、他地域の琉球諸語記述言語学者との共同調査・意見交換を行い、そこで得た調査・分析を利用し、Shimoji (2008: 前述) の章立てを参考としながら奄美大島浦方言の文法について概説した（重野 2015）。これまでも奄美大島方言に関する報告はあったが、他の琉球諸語と比較可能な枠組みで文法記述を行ったことが本研究の特色である。また、言語研究者だけでなく、琉球諸語の維持・継承の一助となる一般向け解説書や音声・映像を含む方言教材の作成、方言指導者の育成に取り組みすることで地域コミュニティへの還元も試みるため、語彙や談話を仮名表記にし、日本語訳をつける作業を進めている。

フィールドワークによる質問紙調査および談話の分析結果から、主に以下のことが明らかになった。

(1) 音声・音韻

浦方言の母音音素と子音音素を以下に示す。

①母音音素

特徴的な母音として、中舌母音の $i[i\sim i]$ 、 $\ddot{e}[\ddot{e}\sim\epsilon]$ がある。中舌母音を合わせて母音は、 $a[a]$ 、 $i[i]$ 、 $u[u]$ 、 $e[e]$ 、 $o[o]$ 、 $i[i\sim i]$ 、 $\ddot{e}[\ddot{e}\sim\epsilon]$ の7個ある。以下、中舌母音 i と \ddot{e} の語例を示す。

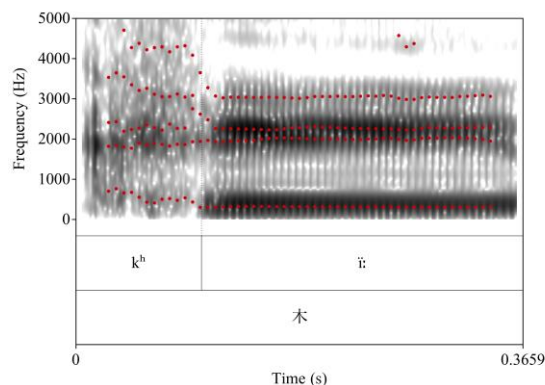
中舌母音 i :

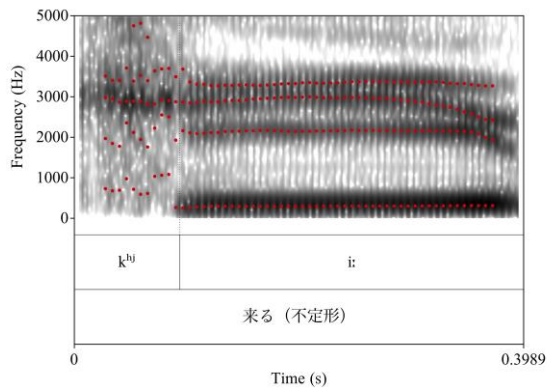
iki $[ik^h i]$
「行け $\langle ikjuri$ 「行く」の命令形)」

中舌母音 \ddot{e} :

$m\ddot{e}\ddot{e}$ $[m\ddot{e}:]$
「前」

参考として、以下に kii 「木」、 kii 「来る（不定形）」の母音のフォルマントを示す（図は音声分析ソフト Praat を用い、白田理人氏が作成した）。





②子音音素

特徴的な子音として喉頭化子音がある。喉頭化子音と非喉頭化子音の区別が意味の弁別に用いられる。以下、喉頭化子音 w^h と j^h の語例を示す。

喉頭化子音 w^h と非喉頭化子音 w :

w^h aa 「豚」

waa 「輪」

喉頭化子音 j^h と非喉頭化子音 j :

j^h uu 「魚」

juu 「湯」

喉頭化子音を含め、子音は $p[p\sim p^h]$, $t[t\sim t^h]$, $t^h[t^h]$, $k[k\sim k^h\sim x]$, $k^h[k^h]$, $b[b]$, $d[d]$, $g[g\sim \gamma]$, $c[ts\sim t^h\sim te]$, $c^h[(ts^h\sim t^h)\sim te^h]$, $s[s\sim \theta\sim e]$, $h[h]$, $z[z\sim \delta\sim z]$, $m[m]$, $m^h[m^h]$, $n[n]$, $n^h[n^h]$, $r[r]$, $w[w]$, $w^h[w^h]$, $j[j]$, $j^h[j^h]$ の 17 個ある (角括弧内は音声実現、丸括弧内は予想されるが現時点で得ているデータに見られない異音である)。

(2) 動詞

①動詞の内部構造

動詞は語幹に屈折接辞を後接させ、単独で文の述語となる。主節・単文の主動詞を定動詞とよび、定動詞を副動的に修飾する動詞を副動詞とよび分ける。動詞の内部構造は以下のように示される。丸括弧内の接辞は随意的であるが、[] 内の接辞は語根もしくは語幹を形成する派生接辞に後接することが義務的な接辞である。

定動詞 :

- ・語根-(派生接辞)-(極性接辞)-[テンス接辞/ムード接辞]

《語例》

- ・語根-ムード接辞

kak-i

書く-命令

「書け」

- ・語根-テンス接辞

kak-juri

書く-非過去

「書く」

- ・語根-極性接辞-テンス接辞

kak-an-Ø

書く-否定-非過去

「書かない」

副動詞 :

- ・語根-(派生接辞)-(極性接辞)-(テンス接辞)-[副動詞接辞]

《語例》

- ・語根-副動詞接辞

kak-i

書く-不定

「書き」

- ・語根-テンス接辞-副動詞接辞

ka-sja-riiba

書く-過去-条件

「書いたのなら」

- ・語根-極性接辞-テンス接辞-副動詞接辞

kak-an-ta-riiba

書く-否定-過去-条件

「書かなかったのならば」

②動詞語幹の分類

形態的なふるまいの相違に基づき、動詞を 3 つに分類する。定動詞の非過去形および副動詞の不定形・目的形・同時形は語幹末音の区別 (子音語幹/母音語幹) によって以下のような接辞の異形態を示す。

(i) 定動詞の非過去形

子音語幹 : *-juri/-jun/-ju-*

母音語幹 : *-ri/-n/-Ø-*

(ii) 副動詞の不定形, 目的形, 同時形

子音語幹 : *-i/-iga/-igacina*

母音語幹 : *-Ø/-ga/-gacina*

以上の基準を前提として、(i) に基づけば母音語幹動詞、(ii) に基づけば子音語幹動詞と同じふるまいをするような折衷型の動詞もある。このような動詞を折衷型語幹動詞とよぶ。

③動詞語幹の語例

(a) 子音語幹動詞

(i)-(a) : *-juri/-jun/-ju-*

語例 *narab-juri*

「非過去 1 : 並ぶ」

narab-jun

「非過去 2 : 並ぶ」

narab-ju-roo

「推量・非過去 : 並ぶだろう」

(ii) (a) : *-i/-iga/-igacina*

語例 *narab-i*

「不定：並び」

narab-iga

「目的：並びに」

narab-igacina

「同時：並びながら」

(b) 母音語幹動詞

(i) (b) : *-ri/-n/-Ø-*

語例 *nagi-ri*

「非過去1：投げる」

nagi-n

「非過去2：投げる」

nagi-Ø-roo

「推量・非過去：投げるだろう」

(ii) (b) : *-Ø/-ga/-gacina*

語例 *nagi-Ø*

「不定：投げ」

nagi-ga

「目的：投げに」

nagi-gacina

「同時：投げながら」

(c) 折衷型語幹動詞

(i) (b) : *-ri/-n/-Ø-*

語例 *misjo-ri*

「非過去1：めしあがる」

misjo-n

「非過去2：めしあがる」

misjo-Ø-roo

「推量・非過去：めしあがろう」

(ii) (a) : *-i/-iga/-igacina*

語例 *misjor-i*

「不定：めしあがり」

misjor-iga

「目的：めしあがり」

misjor-igacina

「同時：めしあがりながら」

以上の基準より、規則変化動詞は(a)子音語幹動詞、(b)母音語幹動詞、(c)折衷型語幹動詞の3つに分類される。語幹にはさまざまな接辞が後接し、語幹と接辞の間で形態音韻論的交替が起こるが、この交替によって現れる音列は、原則として語幹末音と接辞初頭音の組み合わせから一つに決まり、予測可能である。

④ 動詞の派生接辞

動詞語根に派生接辞が後接すると派生語幹をつくる。派生接辞には、以下のようなものがある。

・ 継続-*tu-*

tu-tu-n

「取っている」

・ 受身、可能-*rari-*

kam-ari-n

「食べられる」

・ 使役-*ras-*

nagi-ras-jun

「投げさせる」

・ 尊敬-*i(n)sjo-*

jir-insjo-n

「座りなさる」

・ 丁寧-*rjo-*

izi-rjo-n

「出ます」

尊敬接辞-*i(n)sjo-*は-*insjo-*と-*isjo-*のどちらかを用いてもよく、意味や待遇の違いはない。

(3) 形容詞

形容詞の語形変化と用法について整理する。浦方言の形容詞には日本語の形容詞と形容詞動詞に相当する区別は存在しない。

形容詞語幹は語根と語幹形成接辞からなる。語幹形成接辞には-*sa*と-*ka*がある(例：*haa-sa-ri/haa-ka-ri* 赤い—語幹形成接辞—非過去)が、これらの使い分けについては不明瞭な点が多いため、本報告書では-*sa*を代表形として提示する。

① 形容詞語幹の分類

語幹形成接辞-*sa*は語根によって異形態-*sja*およびゼロで現れる。

・ 語幹形成接辞-*sa*

taa-sa-ri

「高い」

・ 語幹形成接辞-*sja*

muzira-sja-ri

「めずらしい」

・ ゼロ語幹

jiccja-Ø-ri

「良い」

② 形容詞の屈折接辞

形容詞語幹に後接する屈折接辞を提示する。語例として-*taa-sa*「高い」をあげる。

・ 直説・非過去形 -*ri/-n*

taa-sa-ri

「高い」

taa-sa-n

「高い」

- ・直説・否定形 *nen*
taa-sa nen
「高くない」

形容語幹に否定の助動詞 *nen* を後続させることで否定をあらわす。

- ・直説・過去形 *-tan*
taa-sa-tan
「高かった」

- ・直説・過去否定形 *nen-tan*
taa-sa nen-tan
「高くなかった」

- ・推量形 *-roo*
taa-sa-roo
「高いだろう」

- ・推量・過去形 *-ta-roo*
taa-sa-ta-roo
「高かっただろう」

- ・継起形 *-ti*
taa-sa-ti
「高くて」

- ・並列形 *-tari*
taa-sa-tari
「高かったり」

- ・条件形 *-riba*
taa-sa-riba
「高ければ」

(4) まとめと今後の展開

本研究は、琉球諸語の中でも報告の少なかった奄美大島方言（奄美大島浦方言）を対象として、他の琉球諸語や他言語と比較可能な文法記述を試みた。具体的には、音声・音韻および動詞と形容詞の形態論的記述を行った。

今後の展開としては、統語論的な記述と助詞などの詳細な記述を進め、総合的な文法書を作成する。また、より多くの語彙を収集し、この研究で得られた知見を活かしながら談話資料を作成する。さらに、研究成果を継承活動に活かすため、方言教育に資する一般向けの解説書作成も継続的に行う。

- #### 5. 主な発表論文等
- （研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

- 〔雑誌論文〕（計4件）
- ① 重野裕美, 「北琉球奄美大島浦方言の動詞形態論」, 『琉球の方言』, 査読有, 第39号, 2015, pp.33-47.
 - ② 重野裕美, 「北琉球奄美大島佐仁方言の敬語形式」, 『広島経済大学研究論集』, 査読無, 36(4), 2014, pp.75-85.
 - ③ 重野裕美, 「鹿児島県瀬戸内町与路方言の敬語形式」, 『広島経済大学研究論集』, 査読無, 36(3), 2013, pp.45-56.
 - ④ Shibatani, Masayoshi and Hiromi Shigeno. Amami Nominalizations. *International Journal of Okinawan Studies*. 査読無, 4(1), 2013, pp.107-139.

- 〔学会発表〕（計1件）
- ① 重野裕美, 「奄美大島浦方言における名詞複数標識の多義性—純粹複数・近似複数・曖昧・例示—」, 『第10回文法研究ワークショップ「名詞複数標識の多義性—純粹複数・近似複数・曖昧・例示—」』, 2015年5月31日, 東京外国語大学（東京都府中市）.

- 〔図書〕（計1件）
- ① Shigeno, Hiromi, Kayoko Shimoji, Satomi Matayoshi and Satoshi Nishioka. A selected bibliography of Ryukyuan dialectology. *Handbook of the Ryukyuan Languages*. 査読無, 2015, pp.705-720.

6. 研究組織

- (1)研究代表者
重野 裕美 (SHIGENO HIROMI)
広島経済大学・経済学部・助教
研究者番号：70621605